思い出を巡りて

浅野 正千代

疎開生活

昭和15年、東京日本橋に住んでいた私達は不穏な世相に怯えて、姑と長男正毅（4歳）を連れて、実家の別荘がある藤沢市鵜沼海岸に疎開した。母屋に兄伊藤清一家が住み私達は離れに入った。

翌年2月末に次男俊紀が生まれた。12月8日には太平洋戦争勃発、そろそろ食糧事情も悪く衣料も切符制になって来た。

昭和17年11月、陽子が生まれ6人家族となる。

昭和18年1月、大阪に勤めていた主人の弟に赤紙が来て北支*1へ出征。その年の4月正毅が小学校に入学の頃には日米戦争は熾烈となり毎日警戒警報*2、空襲警報に脅かされた。お米の配給はなくなり、高粱*3と大豆粕ほんの少し、次には干し昆布か身欠鰯だけとなる。1、2歳児の幼児にどうやって食べろと云うのだろう。

蛋白質を食べさせたいと、或る日5人で大袋を持って田圃に入りぴょんぴょんと飛び跳ねる蝗を袋一杯持ち帰った。七輪に火を起し大釜に湯を沸かしている時、俊紀がバタバタする蝗を頭から食べている。どんなに空腹だったのだろう。長い脚だけ捨て、貴重な醤油で煮上げ子供達に食べさせた。

主人は日曜毎に遠くの農家にお米や小麦粉を買いに私の着物を持って出かける。絹の着ものを欲しがりお米一升卵5ヶ位（代金は別に取る）くれた。

一年生の正毅はお弁当代わりにサイダー瓶に小麦粉をどろどろに煮た物を入れて持って行く。空襲ははげしく毎日頭上をB29が編隊で京浜地帯を襲う。この海岸にも時々艦載機が機銃掃射を浴びせるように来るようになった。正毅は登校途中警報が鳴ると道の端に腹這いになって身を伏せる。敵機は操縦士の顔が見える位まで下がって機銃掃射を浴びせかける。動く物は皆やられるので、洗濯物や山羊を飼っている家では皆小屋に入れる。

昭和18年6月、正毅が突然発熱、掛りつけの医師は軍医として征ってしまったので片瀬から若い医者が来た。体中の発疹を見てこれは発疹チブスだ、どんどん冷やして熱を下げるようにとのこと。2日、3日と経つうち容態は悪くなるばかり、残念だがもう駄目だと云われた時、弟の出征以来体調をこわし寝込んでいた姑が「正毅はどうか？どうぞして私が代わってやりたいなあ」と云われた後間もなく亡くなってしまった。年配の医者が老衰と言う死亡診断書を作り、正毅を診てくださったが「これは麻疹をこじらせて腹膜炎もおこしている。手おくれかも知れないができるだけのことをしてみよう」と一生懸命手当をしてくださった。一方、姑の葬式と幼い子達の世話で大騒ぎだった。正毅は助かった。胸にかけた成田山のお札が真二つに割れていた。6月25日のことである。

主人は東京丸の内の浅野物産KKに勤めていたので列車が動かず夜中に藤沢から歩いて帰ることもあった。東京大空襲の後、通勤もままならず、体調も悪かったので毎日家で野菜作りをした。東京の空は真赤、時々敵機が火を吹いて墜ちて来る。私達は庭に穴を掘り畳を何枚も積み上げ防空壕を作り日に何回も壕に入った。正毅は「僕もう空襲飽きたよ」と頭巾と鞆をほうり出す。戦争ごっこじゃあるまいし、飽きても何でも繰り返す日が続いた。私は毎日の激しい防火訓練で流産してしまっただけで、3人の子供は太らない。回覧板で「義経炊き」と

云うのを知りやってみる。茶碗一杯の玄米を熱湯に一晩つけ布団何枚もでくるんでおくとお釜一杯に殖えると云うのだが本当に殖えて皆大喜び。地曳網をしている所に行き囲りを跳ねている小魚を拾って来る。だが艦載機襲撃が頻繁になると地曳もなくなる。

突然主人に赤紙が来た。何が幸いだか「肺門周囲炎」と云うことで不合格で帰って来た。丸坊主頭の主人を迎えて私達はひそかに大喜びしたものだ。

だが、昭和19年5月に弟は北支で戦死と云う報せ、二つ違いの弟の戦死は主人をどんなに悲しませたことだろう。宇都宮の師団に遺骨を受け取りに2人で行った。

鵜沼海岸も小型機の襲撃がはげしくなり皆どこかへ疎開して行く。私達も家族5人を守るために疎開を考えなければならぬ時が来た。

集団帰農

昭和20年7月、次官会議で「北海道に集団帰農*4として行けば農地15町歩を無償で与える」と回覧板が来た。お米が自分で作れる。当時の私達にとってこんな魅力的な言葉はない。学生時代からブラジルへ行って農業をしたい希望を持っていた兄は大喜びで参加すると云う。私は外国のように思っている北海道へ行きたくはないが兄達と別れてここに残るのも心細い。理由は、上の姉は義兄海辺誠次郎が三井物産桑港支社勤務のため8年も前から日本にいないし（戦争当時は奉天へ転勤した由）下の姉は義兄福井英一郎が文理科大学教授だったが後、東京气象台に移り昭和18年夏からは北京の气象台長として行ってしまったし、今又兄が北海道へ行けば末っ子の私一家だけになってしまう。兄は「稼働者が4人居る者」と云う参加条件があるので私達をしきりに誘う。とうとう兄達と一緒に行くことに決心した。お米がどうやって出来るものか、農業がどんなに辛いものか全く知らない者同士、只々子供に御飯が食べさせられるならどんな辛いことでも凌いでみせると云う悲愴な意気込みだった。荷物の数、重量の制限があり幾つかのグループを作って7月15日いよいよ見知らぬ北海道へ向けて出発した。

空襲は益々はげしく、青森港がやられたとのことで横浜で一時待機すると云う。事務所のような空家に大勢合宿だ。電気がつけられないため仮設トイレは汚物で足の踏み場もない。長い板を2枚渡したただけのものは大人でも恐ろしい。幼い2人に用をさせる私の方が泣きたい位だった。このことは今でも時々夢に見る。10日余りたつてやっと汽車に乗ることができた。昼は止まって夜だけ動いていたらしい。青森は空襲の後も生々しく連絡船に乗り込むまであちこち煙を吐いていた。やっと青函連絡船の出港だ。

行先はどこなのか、原野なので合掌小屋を造らなくてはならないと函館で大きな鉈と鋸を買う。

鋤とりて鋤とりて子等守らむと
津軽の海を渡りては来ぬ

開拓農家

美唄からは当時の瀧助役（現市長の父上）と下河原氏が我々を迎えいに来ていられた。「ミウタ」ではなく「ビバイ」と読むと教えられる。函館本線に一昼夜乗り8月3日やっと美唄に着いた。一面に樹の生い茂った原野を想像していた私は駅前の静かな家並みを見てびっくり、初めて戦場化した土地から遠く離れてきたのだ、もう大丈夫と喜びあった。

一同は先ず美唄小学校の屋体に集まり受入れ側の農家の人を紹介された後、一心の集会所に5家族程収容された。農家の人が真白なお握りとお漬物を持って来られた。大根もキャベツも大きく切っており、お魚が入っていてびっくりした。鯨漬けと云うそうだ。この時の嬉しさは今でも忘れない。もう一つ忘れられないことがある。連絡船で貰ったものと思うが虱である。シャツの縫目にびっしり白い卵が並んでいるのを拇指の背でプツンプツンとつぶす。もう汚いも何もない。この虱には2、3年も悩まされた。

間もなくラジオで広島と長崎に新型爆弾が落とされたと放送されたが精しいことは分からない。8月15日、集会所に巡査が来て、12時に天皇陛下の放送があるからラジオを聞きに来るよにとのこと。主人達が戻って来て「戦争は終わった、日本は負けたんだ」と云う。皆気が抜けたようになって言葉もない。これからどうなるのだろう。

8月末になって次官会議での約束「農地50町歩無償で与える」と云う話は無いものと思えと云うのだ。今更内地に帰る気はない。百姓をやってみよう。お米を作ってみようじゃないか。兄と合同で水田を作るべく原野に7町2反の土地を買った。10月の寒い日2家族は馬籠に乗って中小屋と云う所に行った。粗末な家と納屋があり、裏には川が流れ小さな橋がかけである。兄達が母屋に私達は納屋に床を作り筵を敷きその上に絵のキャンパスを並べ入り口には筵を垂らした。

冬が来たが石炭の配給がないので防風林から枯枝を拾って来たり葦を燃やしたりしてストーブの囲りに嚙りついていて。電気はなく僅かな配給の石油でカンテラをともした。川の水が凍り始める。積雪を除き鳶口で厚い氷を砕いて小さな穴をあけ柄杓でバケツに水を汲む。家まで運んで又行けばもう氷が張っている。一升瓶に水を入れて一晩おいたらガラスは割れ氷が瓶の形になっている。桶の水につけた茶碗も皆割れている。天井の藁束が一つ二つと落ちて布団の上に雪が積もり朝、箒ではく。初めて体験する原野のシバレの恐ろしさに到底筆には書きつくせない。

吹雪く朝寝息も凍る夜着の襟
目覚むれば夜着一面の粉雪かな

めずらしく石炭の配給があった。

一級炭配給ありてこの宵は
はじめてストーブらしく思ほゆ

小気味よく燃ゆるストーブ囲みつつ
子等に鉢の木話聞かせり

春になると春水がつくと云って積雪の下を水が流れるのだ。部落の人が藁靴に棧俵*5をつけた物を持って来てそろそろ歩き、小学校に避難させてくださる。やっとお米作りの時期が来た。出面さんというのを頼み背丈程もある蓬を刈って農地を作った。馬を飼い兄と主人はプラオとかハロー*6とか云う農具を使って部落の人に馬使いを習っている。兄は青山学院時代乗馬クラブにいたがこの馬とは大部勝手が違うようだ。私達は温床を作り、水につけた種粃を蒔き少し伸びると稗抜きをするのだが稲との区別がつかず出面さんに叱られた。田植え

の腰の痛さ、つらさ、色々な野菜作りもした。

播上げや防風林にカッコ鳴く
豆蒔きち覚えし鳥はさくらどり

2年目は大雨で稲が水没したため、米の収穫は殆どゼロ。部落の人から又着物を添えてお米を買った。私が洋裁の免状を色々持っていることを知られた分教場（山本忠校長）から農閑期に部落の娘さん方に洋裁を教えてくれと頼まれ、週2回通ったが吹雪く日は腰まである雪原を漕いで行かなくてはならない。こうした無理が祟って私は又流産をし、医者に「百姓を続けていたら死んでしまうよ」と云われ、子供達のことも思い合せて農業をあきらめようとする。

楽しいこともあった。自分たちで作った餅つきをし餡餅や蓬餅を作ったり、唐きびや南瓜も沢山食べ子供達は丸々太った。

芋南瓜大豆唐きび燕麦を
蒔きあげしこと誰に語らむ

手の豆のかたくなりたるこの日頃
鳥の啼く音もやや聞きわけつ

教員に

こうした時、市議で部落の山田登氏を通して教育委員会の方から「学校の先生になって貰いたい。住宅もある。」との話。住宅、電気水道、この魅力にとりつかれ、農業を続けるという兄達と別れ、町に出ることになった。

昭和23年3月、雪の中を馬櫓に乗って町に出た。入初から栄町へ、昔の三井二抗社宅2軒つづきの長屋だが物置、石炭小屋もついた3部屋の座敷、先生方が優しく迎えお手伝いしてくださる。主人は美唄盤ノ沢小学校、私は中学校に（小学はとてもむつかしい。中学なら国語と家庭科の2科目でよい）4月10日より通勤することになる。

* * * * *

何不自由なく育った主人や私はこの戦争のお蔭で物の大切さ、辛い仕事のあること等身に沁みて味わうことができた。

僅かの間だったがあの原野での農作業、菊芋を食べ、シバレ芋で澱粉をとり、だんごにして食べたことなど後になってみれば皆楽しい思い出だ。

（挿入の俳句と短歌はその当時、折りにふれて書きとめておいたもの、拙いものだが思いの一端として書き添えた。）

（あさの まさちよ 大正元年生まれ）

***2 警戒警報** 敵機来襲の目的地がつかめないとき、その進行方向でサイレンを鳴らし警戒を呼びかけた。

***3 高粱** 中国産のもろこしの一種。高さ4メートルに達する。食料、飼料、またコーリャン酒の原料にする。

***4 集団帰農** 昭和20年5月、政府は空襲などで戦災にあった都市の罹災者救援のため、「北海道疎開者戦力強化実施要綱」を策定し、5万戸、20万人の集団移住計画を決定し、新聞などを通じて移住者を募集した。道庁内には「北海道集団帰農者受入本部」が設けられた。この移住は、前後25回行われ、約3400戸、1万7千人が東京、神奈川、愛知、大阪などから道内各地に入植したが、一部を除きほとんどの入植者は厳しい自然環境に打ち勝てず、入植地を離れていった。

昭和20年8月3日に美唄に到着した神奈川県集団帰農者は、42戸、182人だった。

***5 棧俵** 米俵の両端につけるわら製の丸いふた。「さんだらぼうし（棧俵法師）」、「さんだらぼっち」ともいう。

***6 プラオ・ハロー** どちらも農耕の道具。

プラオ（プラウ）は、家畜の力またはトラクターの牽引により耕地を切り進み、土塊を反転する農具。唐鋤。

ハローは、プラウで耕した表面の土塊を粉碎し、耕地をならすもの。碎土機。